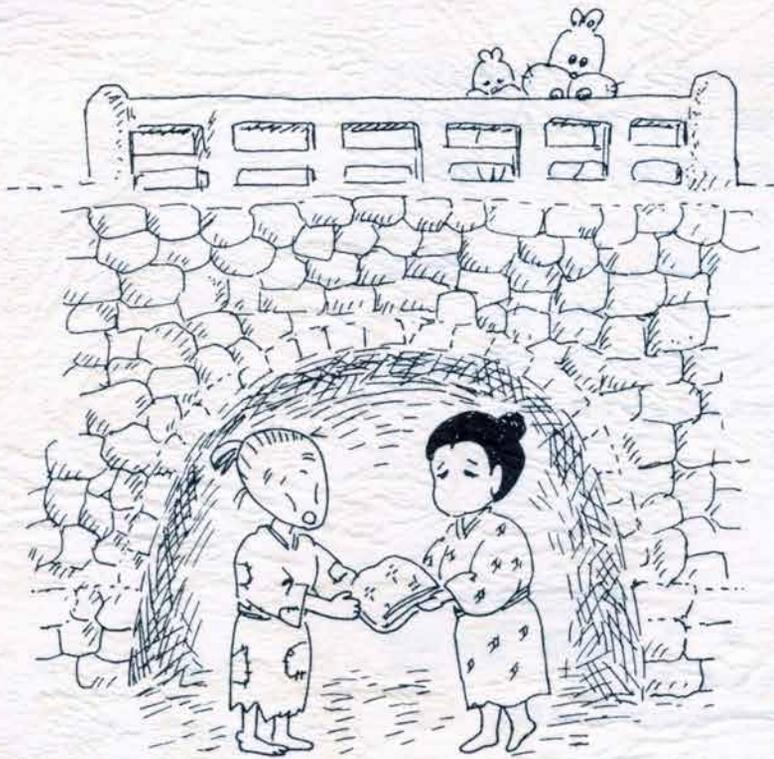


カフンジャー橋

— 文化財調査概報 —



1993年3月

沖縄市教育委員会

あ い さ つ

本報告書は平成4年度に実施した文化財調査の成果を記したものです。

カフンジャー橋は、県内に残存する数少ない重要な石橋のひとつで昭和55年には史跡として市の文化財に指定されています。

今回の調査は橋の発掘を含む、特に実測面に力を傾注し詳細な現状図を作成することができました。この図面は、将来の整備計画を進めていく上で貴重な資料になると思っております。

また、地元の古老の方々には橋の伝説や現在の石橋が建築された当時の状況を聴取する事ができ建造の年代解明におおきな前進の兆しが見えてまいりました。

本書の刊行を契機に、さらに新しい情報が累積されることを願ってやみません。

最後に、今回の調査にご協力を賜りました皆さまに心からお礼を申し上げます。

平成5年3月31日

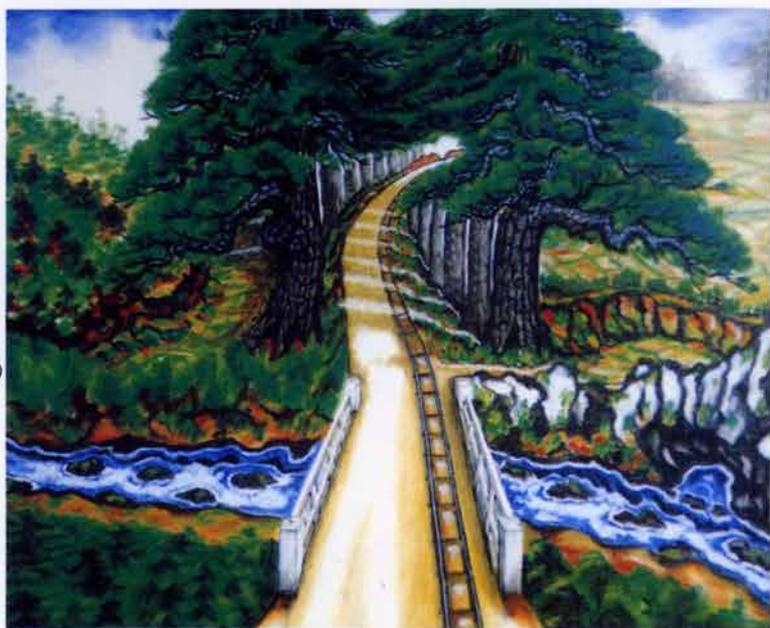
沖縄市教育委員会
教育長 當眞哲雄

目 次

◇ はじめに.....	1
◇ 環 境.....	2
◇ カフンジャー橋の 保存に至る経過.....	4
◇ 橋の概況.....	6
◇ 聞き取り調査.....	9
◇ あとがき.....	12

表紙イラスト
長浜益美

カフンジャー橋一帯の戦前の
風景
(作者：大宜味盛光氏／知花)
(提供：川上雄善氏／美里)



サトウキビ運搬のトロッコ
模型
(作者：屋嘉比政栄氏／美里)

※ 写真上段の中央にはト
ロッコのレールが見える。
そこをトロッコが往来し
ていた。

はじめに

調査はカフンジャー橋の現況を把握するため下記の①～③に留意して行った。

作業の進行は、石橋の東西両側壁の雑草とツタ等の伐採、橋床の試掘、橋台の天場と基礎部分の検出、立面図と平面図の作成、写真撮影などの順序で実施し、都合16日間（平成4年7月6日～31日）要した。

①橋床の試掘

1943年（戦前）以前の橋床には、現嘉手納町にかけてあった沖縄製糖会社へのサトウキビ運搬トロッコレールが敷設されていた。試掘はレールの確認と石敷が埋設されてないか両者を検出するために行った。

試掘穴はトロッコレールのルートと思われる線上へ設定したが、あいにく後世の攪乱が深さ1mまで達し、石敷とトロッコレールは検出できなかった。

②橋台下部の天場と基礎部分の発掘

橋台下部の天場はほとんど露出しているが部分的に土砂の堆積が見られたので、その除去を行なった。その下方の基礎部分は下部構造がどんな状況なのかを確認するために発掘した。

発掘は東立面の南側橋台下部に沿って1.4m×2.2m四方で設け深さ1.5mまで掘ったが、作業の途中から多量の水が湧いてきた。ポンプで汲んだが水は溜まる一方で掘り下げも困難と思われたので中止し、基礎構造の確認には至らなかった。

この一帯は聞き取り調査によると、泥炭地で地盤が軟弱だったらしい。国道329線の道反対

側の旧河川沿いにはカフンジャー（美里の共同井戸）がある。かなり水量が豊富な泉で距離的にかかなり近いので、発掘中の湧き水と地盤が軟弱なものもその影響が考えられる。

③立面図と平面図の作成

実測器材

トランシット、レベル、平板、20m巻尺、コンベックス、水糸、水準器、水球、はしご

立面の実測

写真測量による図化（図4-B）と考古学の遺構実測の遣り方（図4-A）で行なった。遣り方の実測は写真測量のステレオカメラが現場に据え付けできないために用いた方法である。因って成果が2種類なので報告は両図面を明記して紹介する。

遣り方実測

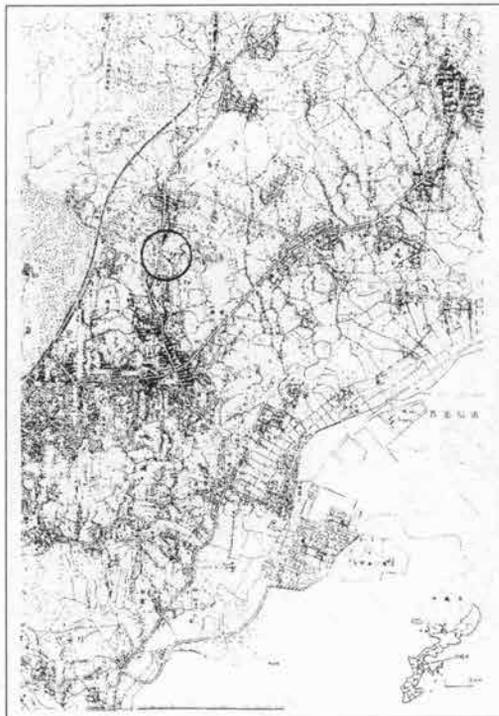
近くの水準点からレベル測量で仮基準点（標高を算出）の設置を行ない。これを基準に立面の西側壁へ水糸で50cm等間隔の水平線を11本設けた。その複数ラインへ交差するように、次はアーチ中央のかなめ石を中心軸としてトランシットで前記と同寸法の水糸を縦に17本配置した。この作業後、側壁は50cm四方の水糸が基盤面に張り巡り、一見くもの巣状を呈する。この段階からコンベックス等で寸法を随時測り、縮尺20分の1の手書き図面を作成した（図4-A参照）。

平面図作成

立面図作成で用いた50cm等間隔の遣り方ラインを踏まえ、平板測量で縮尺20分の1の図面を作成した(図6参照)。



写真測量



環境

沖縄市の位置

沖縄県は鹿児島島の南方約583km、台湾の基隆から約644km地点に位置する。本市は沖縄本島の中央部に位置し本庁舎は東経127度48分、北緯26度19分にあり那覇市の北方約22km、車でおおよそ1時間の圏内にある。

周辺の市町村として、東は具志川市、西に北谷町、嘉手納町、読谷村、南に北中城村、北は石川市、恩納村の7市町村に隣接する。地勢は本市の字与儀から泡瀬二区一帯の東部地域を除けばおおむね丘陵台地で、地質は珊瑚石炭岩土壌、泥岩土壌、国頭礫層土壌、沖積層土壌に大別することができ、この地質分布は本島北部と南部の境目と言われている。市域は東西7.64km南北13km。海拔は最高標高210m、最低標高0.1m。総面積48.70km²で軍用地が37.47%の18.15km²となっている。

人口111,385/世帯数35,409(1992年12月1日現在)

カフンジャー橋の位置(図1)

○……カフンジャー橋

カフンジャー橋一帯の環境

カフンジャー橋は比謝川上流の支流〈カフンジャー川〉に架橋された半円形のアーチ式石橋である。比謝川は沖縄本島中部の西海岸に注ぐ二級河川で「ペリー訪門記」にフィージャー(Fi-ija)と紹介されている。

河口は読谷村と嘉手納町の境界になり、上流に至るまで支流が木の枝状に分布する。カフンジャー橋が位置するカフンジャー川もそのひとつである。

カフンジャー橋付近は近年の諸工事で昔の面影は残ってない。橋のみがポツリと居すわっているが1970年代頃までは往時が忍ばれ、川の両端は赤木の大木が茂っていた。もっと時代が遡るとこの一帯は腕白盛りの児童が橋床から水中へ飛び込んだり、またアーチを横切って反対側の下流へ泳ぐなど、昔の子供達にとって格好の

プールであった。泳げるほど清流なのでウナギ・コイ・フナ・エビ・カニ・貝等が豊富で、大人も子供も仕掛けてよく取ったと言われる。現状からは想像すら難しい。

カフンジャー橋に隣接する国道329号線は、現在コザ十字路から石川への交通の要所である。かつては(戦前・1944年)反対側のカフンジャー橋が「石川線」の県道として機能していた。更に旧北谷間切嘉手納にあった沖縄製糖会社へのサトウキビ運搬路として、トロッコのレールも敷設されていた。

いずれにしろ往時の当地は、児童の通路、人々の往来、荷物の運搬など交通のかなめとして重要な役割を担った。現在、機能の大部分は国道329号線へバトンタッチしたが、現況は沖縄市の指定文化財(1980年10月31日 史跡指定)として、ならびに美里小学校と美里中学校の生徒達の通学路に利用されている。



白川一帯の川の景観(カフンジャー川もかつては同じ風景だったと思われる)

カフンジャー橋の保存に至る経過

カフンジャー橋を保存するための諸調整は、1977年度（昭和52年度）から1980年度（昭和55年度）にかけて取り組まれている。その一端を文化財の公文書綴りから抜粋して述べる。

1977年度の概況

新聞報道

『琉球新報』9月30日付に「霊園予定地に今度は明治時代の石橋 沖縄市、保存、移設を検討」の見出しで掲載されている。

その本文を要約すると、カフンジャー川の上流に県営松本団地と美里高校の建設計画があり、それに伴って周辺の畑地と緑地帯が次々と造成が進んでいる。それが原因になってカフンジャー川が周辺からの流入水で氾濫する恐れが予測されたので、水はけを心配した当市役所建設部は川幅の拡張を計画した。その計画が実施されると、カフンジャー橋の現地保存が無理と判断した当教育委員会は、先述の機関と現地保存についての調整と協議を行なった。

(1)保存の要請文

「川ホンジャー（カフンジャー橋）の保護」について。昭和52年1月10日付、沖市教社第56号で沖縄市長・町田宗徳へ要請文を提出した。

1978年度の概況

「国道329号線道路改良工事に係るカワホンジャー橋の保護」について。昭和53年4月13日付、沖市教社第5号で南部国道事務所長へ要請

文を提出した。要請を受けた南部国道事務所は保存に同意したが、但しその付帯条件として沖縄市側はカフンジャー川の改修位置を早目に決定してほしい旨で了解している。

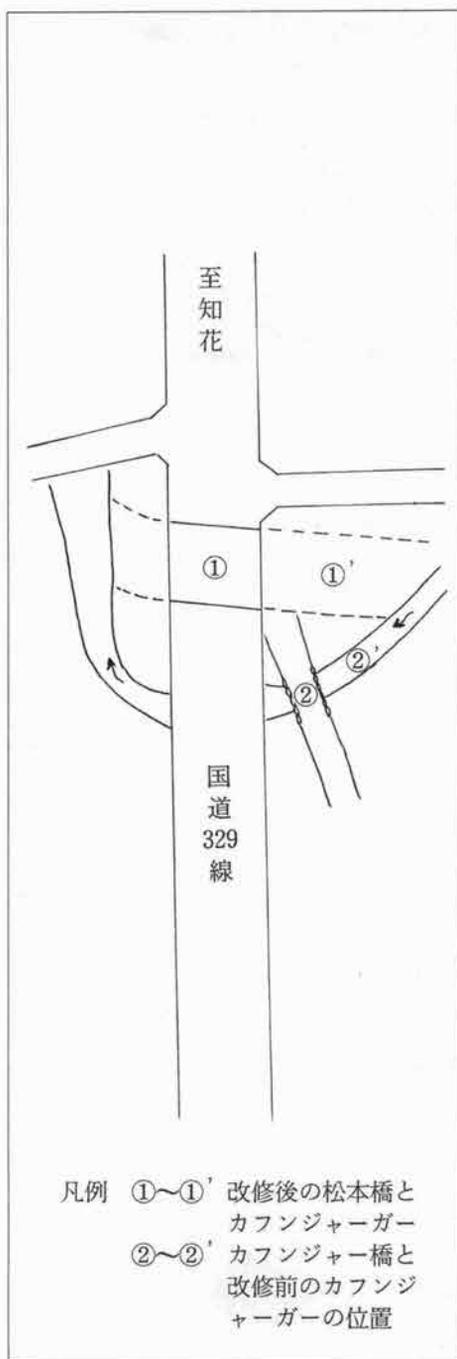
今回の保存要請の切っ掛けを再び整理すると、最も大きな理由は「カフンジャー川の拡張」で、それに附随する形で南部国道事務所管理の国道329号線へ架橋の「松本橋」も関わりが生じた。

1979年度の概況

カフンジャー橋の取り扱いについて上述の両機関と調整及び協議期間として位置づけられる。

1980年度の概況

カフンジャー橋の保存が決定、その後松本橋とカフンジャー川の改修工事が着工される。工事によって石積みへ振動等によるずれの影響が心配されたので、測点を数ポイント選り定期的な観測を施工者へ依頼した。と同時にアーチ天井の真下には頑丈な木組で支保工の構築もお願いした。



カフンジャー河川変更図 (図2)



カフンジャー川河川改修工事



アーチ保護の支保工の構築



橋床（南より）

橋の概況

現況

- 西立面は国道329号線に近接する。その立面の橋台の南端は側壁と歩道間に間知石の擁壁がある。反対の橋台は歩道の間知石積み擁壁とギリギリに接している。
- 東立面の橋台は両端とも間知石積みの擁壁と交差する。この擁壁は新設のカフンジャー川の南岸擁壁に接続される。
- 橋床はコンクリートの欄干が設けられ、通路の両側は車輛進入禁止のパイプが立てられている。
- カフンジャー川が河川変更されたためにアーチの直下は普段水が流れてなく、雨降りに国道からの鉄砲水が流れこむ程度である。
- 橋床はアスファルトとコーラル敷きである。
- 橋台、拱環石、側壁、アーチ天井等の石積み透き間は部分的にセメントが用いられている。

構造

- 半円形式アーチ橋で石材は琉球石炭岩を用いている。
- 橋台は基礎部分（仮称・橋台下部）と拱環石の石積み立ちあがりを据え付ける部分（仮称・橋台上部）に区分される。
- アーチの拱環石は、両立面とも「かなめ石」を中心に左右対象それぞれ9個ずつ配置され、都合18個で構築される（図3・4参照）。

①アーチのかなめ石・天井の石・拱環石等の寸法

〈かなめ石〉

かなめ石は両立面のアーチ中央に1個ずつ配置される。その外観は、両方とも四隅の角がとれた隅丸方形で、全形は横長の長方体を呈する。寸法は東立面のかなめ石が横25cm・縦31cm・幅50cm、西立面の場合は横22cm・縦35cm・幅95cm

を測る。

《天井の石》

アーチの天井石は長方形の石で構築される。その寸法はバラツキが見られ、縦25cm前後・横50cm前後～90cm前後、両立面のかなめ石の寸法に近い石が用いられている。

《拱環石》

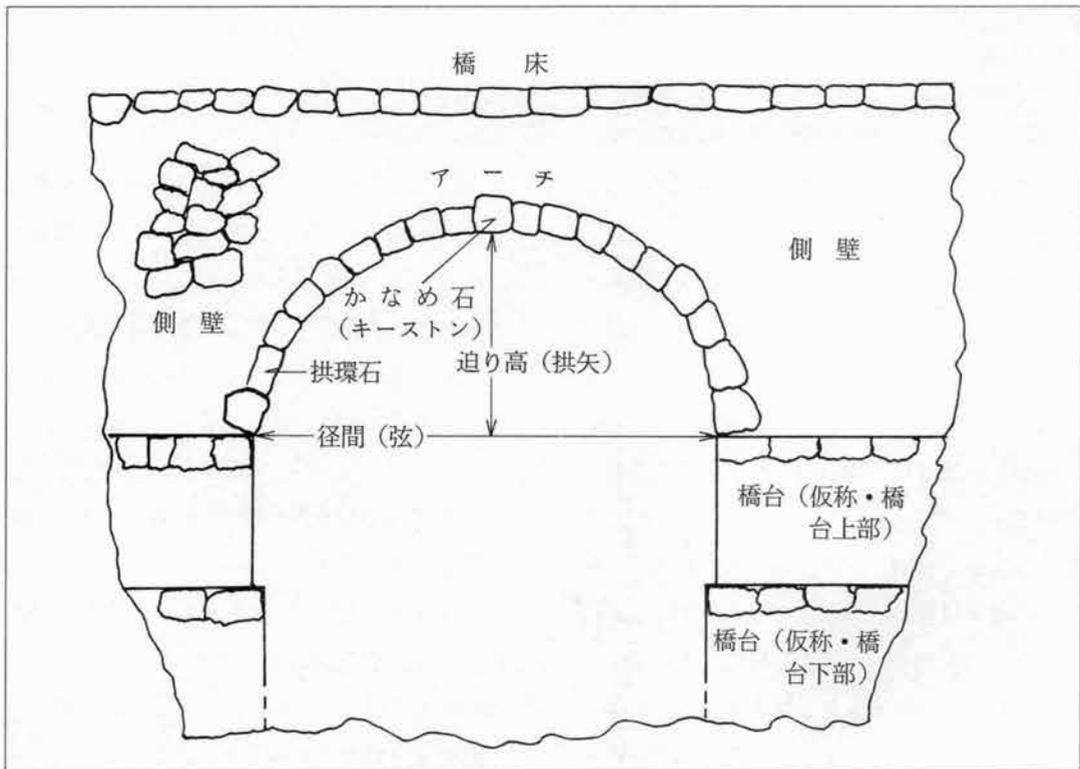
アーチに配置の拱環石の寸法は、東立面は横が約21～35cm・縦は約27～40cm、西立面の場合は横が約22～35cm・縦は約23～37cmの枠内である（表1・2参照）。

(表1)：拱環石の寸法／横×縦／cm単位

横			縦		
寸法	東立面	西立面	寸法	東立面	西立面
20～30	15	13	25～30	13	10
31～	3	5	31～	5	8
計	18個		計	18個	

(表2)：拱環石の寸法／幅／cm単位

寸法	東立面	西立面
40～50	/	
51～60		
61～70	3	5
71～80	4	2
81～90	5	1
91～100	/	
計		



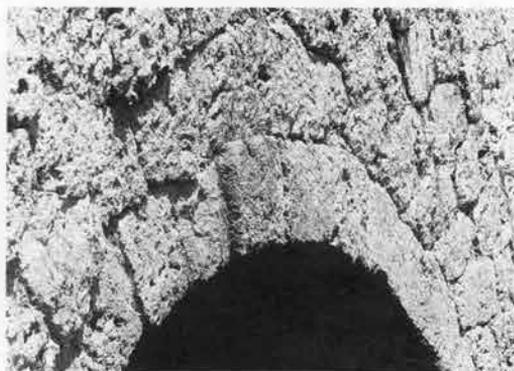
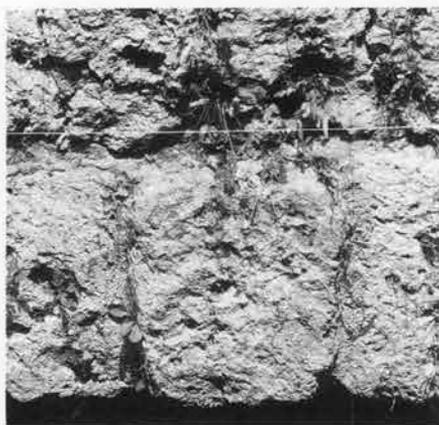
橋の構造名称 (図3)



アーチ（東立面）

かなめ石（西立面）

かなめ石（東立面）



②アーチ以外の各部分の寸法

《東西両立面の寸法》

測定のポイント（A～B………o～P）は特徴的な部分を選定した。その作業は橋床～かなめ石、迫り高、径間、橋台下部、橋台上部等で実施したが、両立面の各部位間の寸法はミリメートル単位で大差が見られない(表3・図5参照)。

《平面の寸法》

測定のポイント（B～J………J～R）はかなめ石間、橋台上部間、橋台下部間、橋床間、かなめ石縁と橋床間の水平距離などである。測定値の特徴を述べると、かなめ石は拱環石の縁より約5cm飛びでており、橋床からかなめ石への勾配は両立面異なる(表4・図5・6参照)。

(表3)：東西両立面の寸法/m単位/mmは省略

測点	東立面	測点	西立面	備考
A～B	1.43	I～J	1.47	橋床とかなめ石上場間の水直距離
B～C	1.76	J～K	1.73	迫り高(拱矢)
C～D	1.23	K～L	1.23	橋台上部間の垂直距離
E～F	3.68	M～N	3.65	径間(弦)
G～H	3.30	O～P	3.30	橋台下部両端の水平距離

※ 測点ナンバーは(図5)を参照

(表4): 平面の寸法/m単位/mmは省略

測点	両立面間の寸法	備考
B~J	5.13	かなめ石間の寸法
E~N	5.88	橋台上部間の寸法
F~M		※部分的に埋まっています測定不可能
G~P	6.13	橋台下部間の寸法
H~O		※部分的に埋まっています測定不可能
Q~R	4.62	橋床間の寸法
B~Q	0.37	かなめ石縁と橋床間の水平距離
J~R	0.14	” ”

※ 測点ナンバーは(図6)を参照

聞き取り調査

調査は橋の建造がいつ頃で誰が作ったか、更に民話等について聞き取りを行なった。

橋の建造

調査で聞いた話を年代順に述べる。

- 明治38年(1905年)に県内で早魘が発生した。その対策事業として同年に架橋された。〔話者: 石川正英氏(86才位) 調査: 1978年度〕
- 美里小学校から池武頭に至る道路は「明治道路」と言われ、大正元年(1912年)頃に開通した。この道路より架橋年代は古いので、明治43年(1910年)頃ではないかと思う。〔話者: 山田栄一氏(明治38年生) 調査員: 仲宗根寛氏(文化財調査審議委員) 調査 1978年度〕
- 平良松之助氏(明治6年生・美里)が美里尋常高等小学校へ通学していた12歳頃、現在の石橋はなく木橋で大雨の時には知花から遠回

りして家へ帰った。〔上記と同じ〕

次に紹介する池原賢三氏(明治44年生)の伝承はより現実的で参考になると思われる。

- 大正3年(1914年)頃に工事着工し完成は大正6年(1917年)頃でこの時まで川を渡った。
- 建造は難工事だった。泥炭質で地盤が軟弱なため何回架けても橋は沈んだ。
- 橋台からアーチへの石積みはマンホール状に下部から上部へ巻かれている。
- 戦後、水道管工事で壊そうとしたが出来なくて別ルートで敷設した。
- 橋を建造したイシジューク(石大工)の名前と出身地は金城カメー(糸満)と城間ニワー(浦添)であった。工事請け負いで損した二人は長期間、出身地へ帰れずしばらく留まっていた。後にカメーは郷里へ戻り、ニワーは

松本に永住した。話者の賢三さんは松本に留まったニワの娘と結婚した。

。石材は読谷山産である。城間ニワは首里城の石大工として関わった事がある。彼の造った墓もまだ残っている。〔調査員：宮城昭美〕

池原賢三氏、外3名の伝承を紹介した。伝承の中で最も興味がある架橋年代は、上限が明治38年頃（1905年）そして下限は大正6年頃（1917年）である。約12年の年代幅があるのでここでは明治末から大正初めとして位置づけする。

紹介した話しはいずれも貴重である。その中でも池原氏の事例は特徴的で示唆に富む。

民話

文化財の記録保存調査で採話した民話と、川上雄善氏の「カフンジャー よもやま話」を述べる。

カフンジャー由来(1)

石川市東恩納の男だったと思う。この人は首里のどこかの殿内勤めをしていたが放浪人だったらしい。あまり放浪人なので親兄弟が「もう、おまえは家に来るな」と言って追い返した。母親はあまり気の毒に思って薬にお金を包んで「クリ ムツチイケー」と言って荷物を持たした。彼は荷物を持って家を出た、そしてカフンジャー川の川岸まで歩いて来たら、途中から雨が降り始めたがそのまま川を渡った。

川岸にガマ（洞穴）があったので、雨宿をしそして母親が手渡した荷物に目をやり「ワッター

ウヤヌチャーヤナー ジャーフエーヌムン ヤツサー カンエールムン ワンニンカイ ムタチ イキンデイチ ヤラチエーツサー」と呟いた。あまりにも寒いので荷物に火をつけて温まろうとしたら、その中から突拍子もなくお金がでてきた。

家から追いだされた彼は母親の情を「カフー」と思った。カフーはありがたい意味で、出来事が川（方言名・ジャー）の近くなので彼はここを「果報の川・カフンジャー（方言名）」と称した。カフンジャー名称もその伝承にちなんでいる。（池原賢三翁談 松本）

カフンジャー由来(2)

昔、山原に金持ちの夫婦がいた。スクブ御嶽の所の神様だったのか、そこには池原の大將が住んでいた。その池原の大將が山原の金持ちの妻を望んで自分の所に連れてきた。夫はあわれにも物乞いしながら廻り歩くうちにスクブ御嶽の所にいる妻の家に来た。妻はあわれな夫の姿を見て葉と一緒にそっと銭をむしろに包んで渡した。妻だと気付かないまま男はそれを貰ってカフンジャーの所まで来た。そこで暖をとろうとして葉を燃やすと、燃えカスの中にお金の形を見つけ、男は「フーンネーラン（幸運もない）果報んネーラン カフンジャー」と言ったと言う。この伝えからカフンジャーという川の名を付けた。

（松下盛一翁談 明治45年5月10日 池原）

カフンジャー由来(3)

17、8才頃の男女が好きあって夫婦になった。

ある日喧嘩をして別れたが、その後妻は財産家と再婚し夫は乞食になった。ある日夫は、それと知らずに再婚した妻の家に物乞いに行った。妻はすぐに前夫だと気付き、藁の中に黄金を隠し、フクター（ぼろ布）で包んで持たせた。夫はそれを持ってカフンジャーの所まで来たが、そこで雨が降り出したので、橋の下で雨宿りしながら寒さを凌ぐため藁を燃やした。黄金も一緒に燃やしたことに気付いた男は「カフアテムンジャー、カフンジャー（果報はあったのにな、果報川＝カフンジャー）」と言った。そのことから、この川をカフンジャーと言う。

（島袋貞栄翁談 明治41年6月20日生 知花）

「カフンジャー よもやま話」

私の父（故川上三郎、明治六年八月生）から子供のとき、カフンジャーのことについて次のように聞かされた。

昔、乞食がカフンジャーの泉のある岩陰に雨宿りをして何日か住みついた。それを気の毒に思い、慈悲深い松本の一婦人がカフンジャーの泉に飲水を汲みに行く度毎に甘藷を持って行ってあげた。すると乞食はそれを有難く頂き、手を合せて拝みながらカフーシドゥーカフンジャーと言った。

そのときから誰言うもなく此の地をカフンジャーと称するようになった。国道にある橋は、米軍が松本寄りに架設したので松本橋と称しているが、この一帯は昔からカフンジャー橋と呼び馴れているので、美里では誰も松本橋とは言わない。

カフンジャーの名称は昭和七年発刊の美里尋常高等小学校50周年記念誌にも、当時の知花の古老、東殿内門（屋号）のオジーと前大城（屋号）

のオジーお二方の話が詳しく記載されているが、私が父から聞いた話とも凡そ同じである。

昭和の初期に私が美里小学校へ登下校のとき見たカフンジャーは、水面よりも橋がかなり高かった。古びたアーチの石積と、ランカンにはつる草（チタ）と朝顔がからみついて生え、時期になるときれいな朝顔の花が咲いていた。

美里長堂の琉球松街道を通り過ぎると、すぐにカフンジャー橋になり、美里、松本の中間にあるため人里離れて淋しい所だった。

現在、美里寄りの地は小字川ホンザーとなっている。周辺は昔、殆どが畑地であった。対照的に松本寄りには松林の連続だった。

私達はこわごわ橋の上から水の流れをよく見た。実にきれいな清流でターイユ（フナ）やタナゲー（エビ）、カニ等が泳いで涼をよび、朝顔の花が咲いてる橋と近くにある松本の手小主の三味線の音色は、子供心の郷愁を深くかきたてるに充分だった。

これより先、即ち大正14年頃このカフンジャー橋にまつわる事件がおきた。このことについて、井上文男先輩にお伺いに行き聴いて見ると次のような事件があった。

大正二年生の美里出身の6年生の男の腕白盛りの連中達が大雷雨に、橋から濁流の川に飛び込み泳いでいる所へ、美里の嘉陽宗正医師が知花から往診の帰りご覧になり大声で叱りつけたため、驚いた子供達は橋の下を潜って川下に逃げたので嘉陽医師は弱れていると勘違いして、美里字民に知らせたからたまらない。

字民はドラ鐘を乱打してとるものもとりあえず、すわ一大事と子供達の救助のためカフンジャーに駆けつけて見ると飛び込んだ筈の子供達は一人もいない。子供達は大人の騒ぎを知ってこれ

またびっくり、川下から松林ぞいに裏道を通り字内に逃げ帰って我が家に隠れた。心配した大人達は比謝川近くまで捜したようで、後にさんざん子供達は親からも叱られ罰された。

私の従兄の比嘉儀正もその仲間の一人だったので、母は泣きながら私を背負って里方に駆けつけて行ったのを私も覚えている。

その当時はカフンザー川に飛び込んだ子供達はみんな故人になっているが、飛びこまなかった私はこの通り健在であると井上文男先輩は笑って話されていた。

あ と が き

本概報はカフンジャー橋について、下記の点に留意して成果を紹介した。

- ①発掘調査 ②実測調査 ③写真 ④聞きとり調査 ⑤川上雄善氏の原稿 ⑥保存に至る経過

以上の項目を紹介した。今後の対応は環境整備が重点になる。整備の中で最も比重を施めるのは、橋の両立面で石積の側壁の迫り出しがかなり進行しており、さらに後世の人為的な破損箇所も多い(図5参照)。緊急な修復が必要であろう。

次は全体計画としての屋外展示、いわゆる「史跡公園の整備」が課題になる。この概報が今後の環境整備事業のきっかけになれば幸いである。

《協力者》 (敬称略)

- ・本文中の話者の方々及び調査員
- ・川上雄善 大宜味盛光 屋嘉比政栄
- ・写真測量
写真測量と図の提供
株式会社 エス・テック

《調査組織》

- ・調査主体
沖縄市教育委員会
- ・調査員
仲本朝彦/比嘉良憲/廣山實/比嘉賀盛/
新屋良博/玉那覇知樹/宮城昭美/波平裕子/宮城利旭
- ・資料整理、原稿執筆及び編集
あいさつ……………仲本朝彦
聞き取り調査……………宮城昭美
図面及び写真……………宮城利旭
「カフンジャーよもやま話」……川上雄善
編集及び上記以外の執筆……………宮城利旭

《参考文献》

- ①川と水と人間と 比謝川をそ生させる会
1982年12月28日
- ②橋 (株)草思社
1981年10月5日
- ③沖縄の石造文化 沖縄出版
1987年9月1日
- ④字屋良文化史 伊波義祐
昭和52年6月1日
- ⑤沖縄市史 第七巻 沖縄市教育委員会
平成2年3月29日
- ⑥沖縄市史 第八巻上 沖縄市教育委員会
昭和61年11月29日

⑦沖繩市史 第八卷下 沖繩市教育委員会

昭和63年 3月31日

⑧博物館だより No.18 沖繩市立郷土博物館

1992年 3月 1日

⑨橋 1990-1991 土木学会

平成 3年12月18日

⑩角川日本地名大辞典 47沖繩県 角川書店

昭和61年 7月 8日

⑪民俗資料の技術史 東京電機大学出版局

昭和61年 3月31日

⑫嘉手納町史 資料編1 嘉手納町役場

昭和58年 3月20日

⑬石川市史 石川市役所

昭和63年 3月31日



橋東立面の遠景

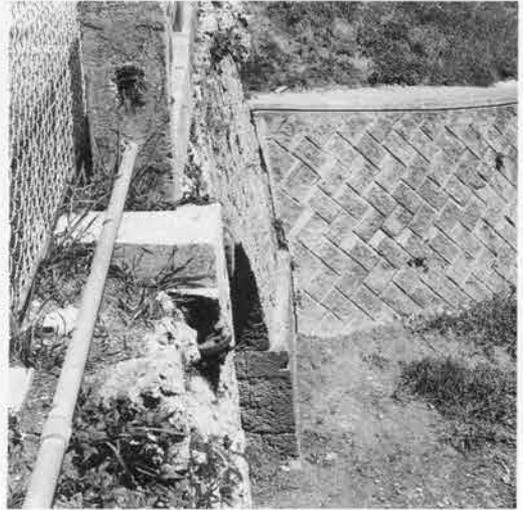
橋東立面の近景





橋東立面の側壁

橋東立面の側壁、蔦伐採後（南より）



橋東立面の側壁、蔦伐採後（北より）



橋床の試掘（南より）

同上、部分的に中込め石が見られる（南より）



同上、（北より）



東立面の南側部分の橋台下部の試掘（北より）

同上、（東より）



同上、（東より）



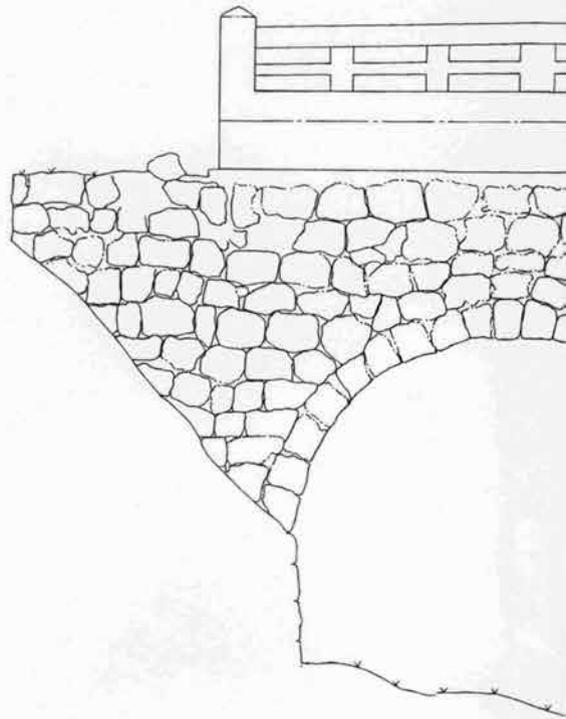


東立面の石積み現況（東より）

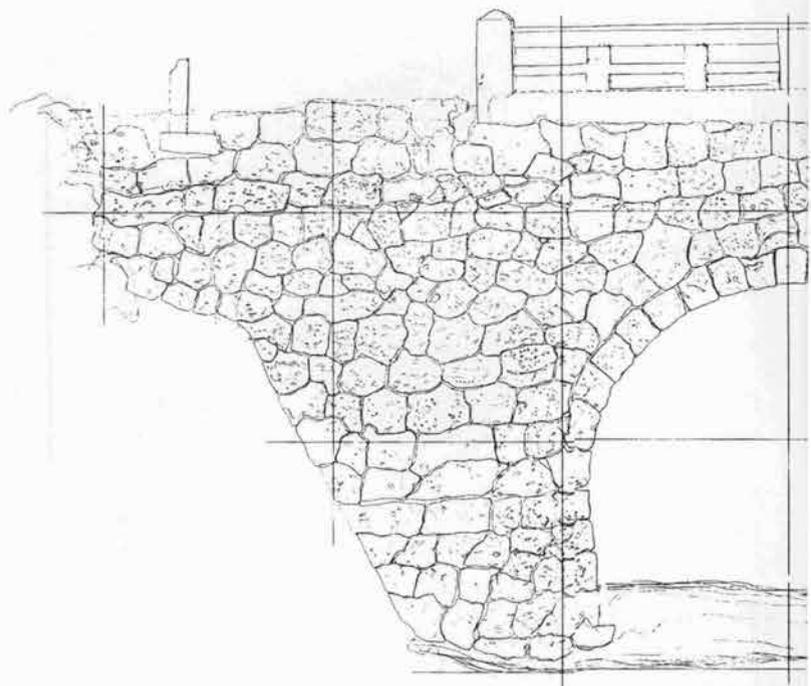
東立面の南側半分の現況（東より）



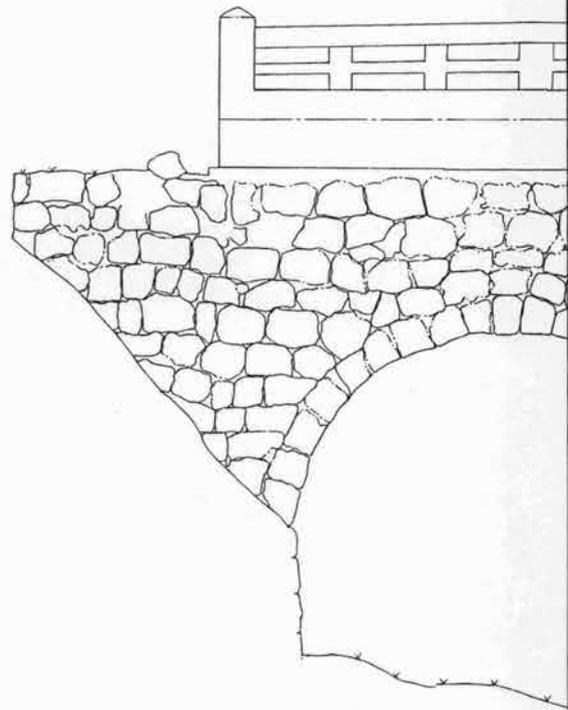
東立面の北側、橋床及び側壁の現況(東より)



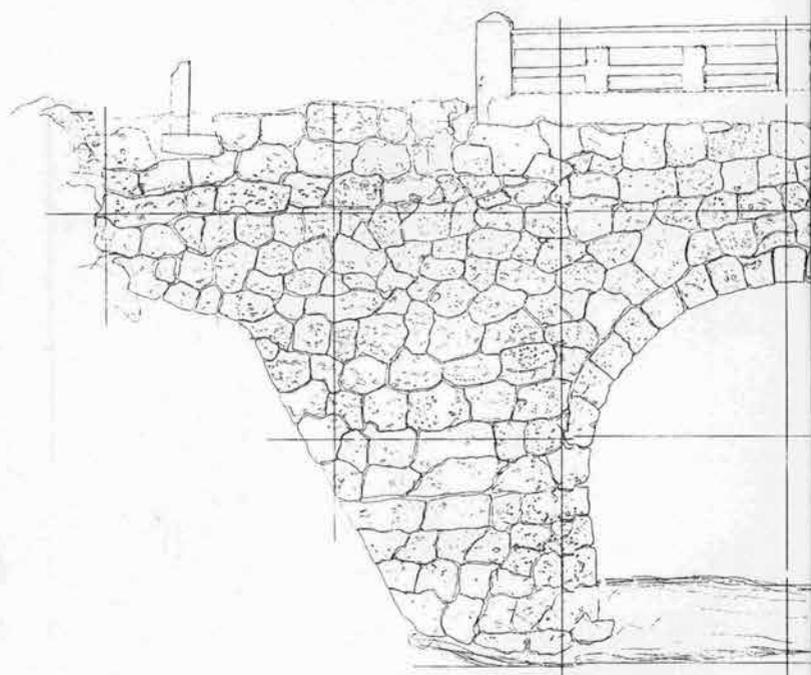
西立面图



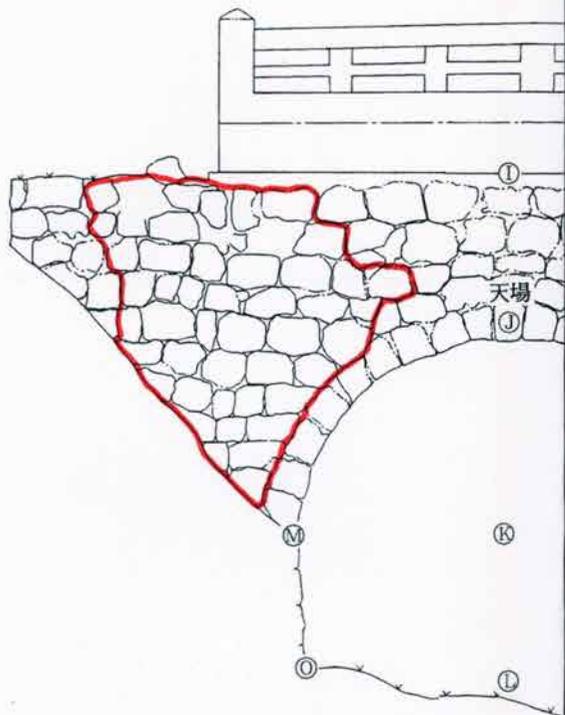
東立面图



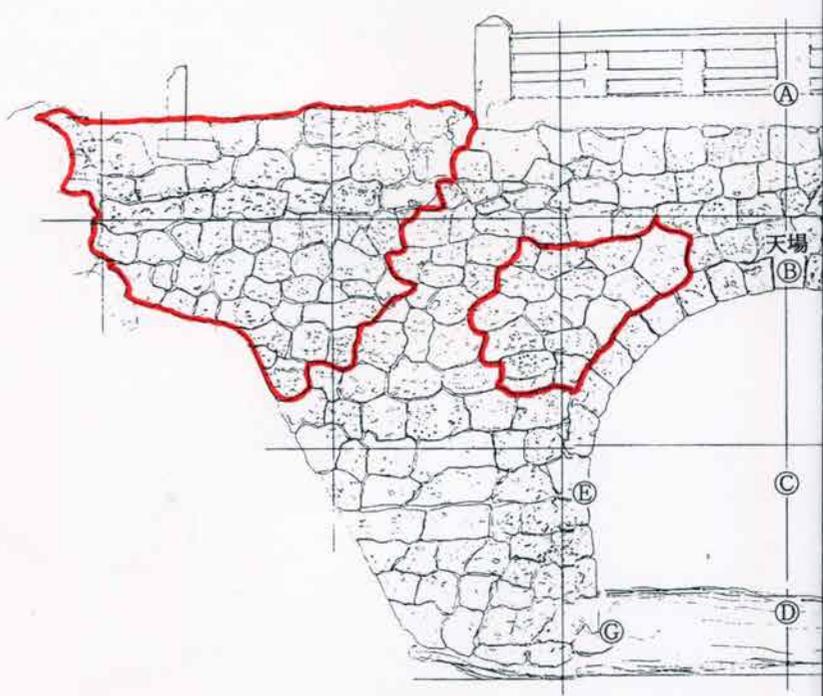
西立面图



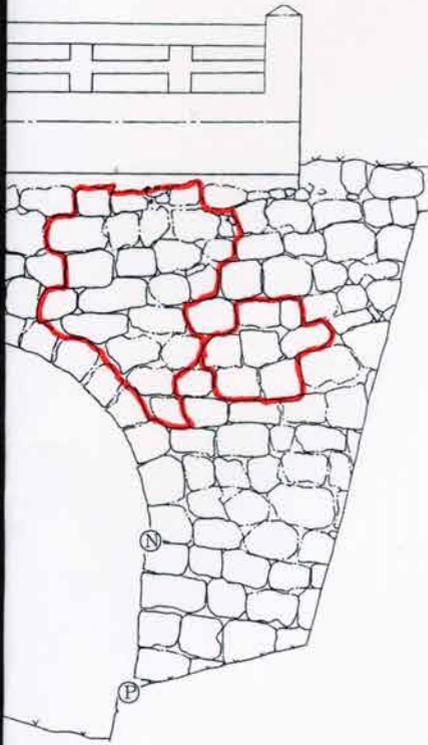
東立面图



西立面



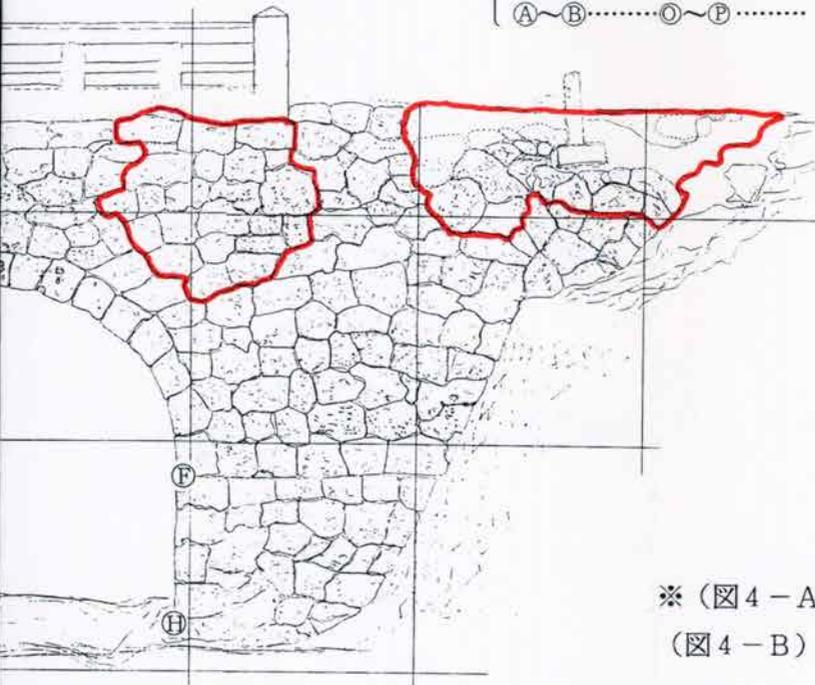
東立面



図

凡例

- 石積の側壁の迫り出しが目立つため修復を要する部分
- ○ (表 3・4) の測点ナンバー

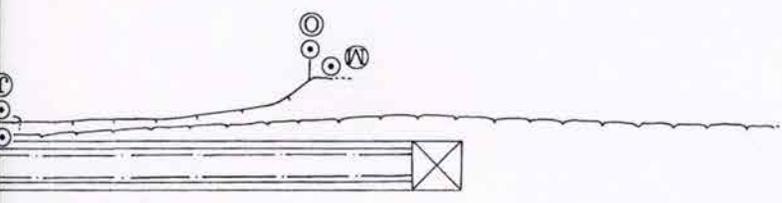


図

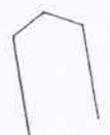
※ (図 4 - A)
(図 4 - B)

カフンジャー橋立面寸法及び石積み現況図 (図 5)

西



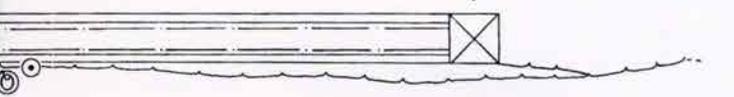
B' →



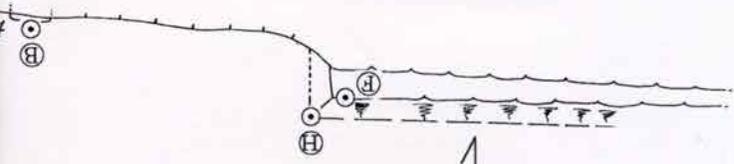
東側壁の断面



B' ↓



B ↑



東

B →



面

なめ石

かなめ石

面

A'

西側壁の断面

A'

A

凡例

Ⓑ~Ⓔ …… (表4) の測点ナンバー

カフンジャー橋平面図及び断面図 (図6)

かふんじゃー橋

—文化財調査概報—

沖縄市文化財調査報告書第16集

1993年3月1日印刷

1993年3月31日発刊

発行 沖縄市教育委員会
沖縄市字美里1100番地

編集 沖縄市立郷土博物館
〒904沖縄市字上地235番地3
TEL 932-6882

印刷 協業組合 丸正印刷
TEL 946-5151 (代)